

百科

Kakamigahara
Encyclopedia



特集

企画展「中世鶺沼の栄枯盛衰」 発掘調査から見えた 中世の鶺沼



CONTENTS

特集	発掘調査から見えた中世の鶺沼	02
調査速報	鶺沼に栄えた古代集落	06
事業報告	慶長五年八月の美濃	07
	坪内節太郎展 - 芝居をみる -	08
	@えぎめ展	10
各務原を知る	川島の昔と今	12
各務原の文化財	新指定！聖観音菩薩立像	14
TOPICS	坊の塚古墳の真価	16

令和6年度埋蔵文化財調査センター企画展「中世鵜沼の栄枯盛衰」 発掘調査から見えた中世の鵜沼

鵜沼は、古代の東山道が斜走して木曾川に至る場所で、尾張国への渡船場のある交通の拠点でした。中世(鎌倉時代・室町時代・戦国時代)には、宇留間市と呼ばれた市場の存在が知られており、室町時代には承国寺が建立され、戦国時代には木曾川沿いに鵜沼城・伊木山城が築かれました。

本企画展では、鵜沼古市場遺跡の発掘調査で確認された遺構や遺物から、中世の鵜沼の様子を紹介しました。

考古資料と文献史料

中世に焦点を当てた企画展は、埋蔵文化財調査センターでは今回が初めてです。鵜沼古市場遺跡の発掘調査によって、中世の遺構や遺物が多く確認されたことで、今回の企画展を開催することができました。

企画展では、出土した遺物だけではなく、文献史料から分かる中世の様子をパネル化し、より分かりやすい展示を目指しました。

企画展のメインとなった、室町時代の美濃国守護・土岐持益が建てた

承国寺の展示では、承国寺住持の交代に関わる記録や年貢についての書状などの文献史料をもとに、創建から廃寺までの、長さ6mにおよぶ運営年表を作成しました(写真1)。

年表の作成では、主に鵜沼に定住した漢詩人・万里集九の詩文集『梅花無尽蔵』を参考にしました。この詩文集には、承国寺の僧たちとの交流や詩会の様子などが記載されています。詩には、作詩年月日が記されているものが多くあり、承国寺の当時の様子を窺うことができる貴重な史料です。

模型の製作

企画展には、出土遺物や説明パネルだけではなく、伊木山城跡と鵜沼城跡の200分の1スケールの模型を製作して展示しました(写真2)。

伊木山城跡の模型では、伊木山山頂の曲輪の配置状況や石垣の様子を示し、実際に登ったときに石垣の位置が分かるようにしました。

鵜沼城跡は、発掘調査が行われていないため詳細は分かりませんが、鵜沼城が建てられていた城山山頂の様子や城山の形状が分かるようにしました。

関連イベントの開催

企画展との関連イベントとして、岐阜市歴史博物館の井川祥子氏を講師としてお招きし、「中世の鵜沼ー鵜沼古市場遺跡の発掘調査成果からー」と題した「まいぶん講演会」を開催しました(写真3)。講演会では、土師器皿をはじめとする出土遺物を紹介され、鵜沼古市場遺跡が承国寺を中心に栄えた様子を分かりやすく解説していただきました。

参加者からは、「講演を聞いて現地を歩き回りたいくなった」「京の文化が美濃にきた経緯など時代背景が良



模型製作の様子は4・5ページへ!

写真2 模型の展示

約1ヶ月間開催した企画展には、1069人の来場がありました。アンケートでは、「企画展を見て鵜沼地区の発展の様子が分かり大変面白かった」「承国寺の存在をはじめて知った」「鵜沼地区に中世の遺跡が豊富に残っていたことを知り、大変勉強になったなど、多くの感想を

企画展を終えて



写真3 まいぶん講演会の様子

く分かった」などの感想をいただきました。本企画展と合わせて、中世の鵜沼についてより理解を深めることができましたのではないのでしょうか。

いただきました。

鵜沼に承国寺が建てられていたこと、その創建者が土岐持益であったことを初めて知ったという人も多くいました。今回の企画展が中世の鵜沼を知るきっかけとなり、より深く関心を持っていただけたのであれば、嬉しく思います。

また、アンケートでは、「パネルの文字をもっと大きくしてほしい」「A3サイズ1枚程度の簡易解説がある」と良かったなどのご意見や、企画してほしいテーマ・内容もいただきました。

今後の企画展では、これらの貴重なご意見を活かして、分かりやすい展示を目指して、工夫していきたいと思えます。

(近藤美穂)



かかみがはら百科プラス No.7 (A4・8ページ)
埋蔵文化財調査センターで無料配布中



写真1 承国寺運営年表

会期 / 令和6年8月3日~9月8日 会場 / 中央図書館3階 展示室A

1/200 城山

じょうやま



今回製作した模型で、それぞれの山の特徴をより分かりやすく示すことができました。伊木山の山頂付近は、曲輪の痕跡である平坦面の形状が見て取れました。城山は、想像以上に急峻な姿をしていました。また東側に入り江があり、舟の発着に適している様子が分かりました。資料を立体化することで、写真や図面をより活かすような展示を、今後も提供していきたいと思っています。
(村瀬美香子)

整理作業レポート

埋文センター企画展初！ 立体模型を製作

令和6年度埋蔵文化財調査センター企画展「中世鶴沼の栄枯盛衰」では、地形図をもとに立体的に再現した伊木山と城山の模型を展示して、それぞれの山の形をよりリアルに体感していただくとうと試みました。その作業工程を紹介します。

1/200 伊木山

※発掘調査を行った山頂部分のみ



作業6 仕上

発掘調査区や石垣を示したり、いかに人や人を配置したりすることで、見えをよくなりました。



作業4 成形

段差をなくすため表面に石膏を塗ります。山土や岩石の質感を出すのに苦労しました。



作業2 切断

型紙に沿って厚さ5mmのパネルを1枚1枚切り出していきます。模型の5mmが、実寸の1mとなります。



作業5 彩色

伊木山は曲輪と山の斜面の色を変え、城山はチャートの岩石らしい色で塗りました。

作業3 積上

標高の低いパネルから順に載せていきます。伊木山は9枚、城山は58枚を重ねました。

作業1 型紙

地形図を縮尺1/200に印刷します。等高線を1mごとにトレース用紙に書き出し、型紙を作ります。

鵜沼古市場遺跡D地区発掘調査速報 第五弾

鵜沼に栄えた古代集落



写真1 須恵器出土状況



写真2 多種多様な器種

鵜沼古市場遺跡D地区の発掘調査は、令和6年度で5年目を迎えます。発掘調査と並行して出土遺物の整理作業を進めており、奈良・平安時代に生きた人々の暮らしが見えてきました。今回は本遺跡で最も多く出土している「須恵器」(写真1)に着目し、市域における古代集落の動向、その背景に迫ります。

須恵器とは

古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけて列島各地で生産された陶器質の土器のことをいい、野焼きの土器に比べて耐久性・耐水性に優れた器物です。本遺跡で出土した須恵器には、坏身・坏蓋、盤・高坏といった食膳具のほか、貯蔵するための甕・壺、調理具として使われた甑など、バリエーションに富んだ器種が見られます(写真2)。これらは庶民の生活の中で広く使用されたものであり、この地域に人々の営みがあったことが分かります。

須恵器生産と集落の繁栄

本遺跡では、須恵器の出土とともに建物跡が集中的に確認されています。市域に分布する他の集落遺跡も含めて概観すると、各務郡では8世紀の前半期から建物数が増加する傾向にあります。このことから、当該期に市域で人口増加があったと見ることでありますが、その背景のひとつに「美濃須衛窯」(写真3)の操業が挙げられます。

美濃須衛窯は土器生産の工房跡で、市内北部の山間部に点在します。7世紀に須恵器の生産が始まり、8世紀初頭には最盛期を迎えたと考えられ、各務郡の主要産業として盛行しました。須恵器の生産は素材の獲得から始まり、一度に大量生産を試みるため、多大な労働力が必要であったことが想像できます。また、美濃須衛窯の須恵器は県外の遺跡でも出土しており、遠方へ移出されていたことが分かっています。須恵器の生産・流通が本格化する時期に、専門的に作る工人や物資を運搬する人員が各務郡に移り住んだのではないかと考えられます。



写真3 美濃須衛窯(天狗谷遺跡)

鵜沼古市場遺跡は木曾川の川湊に位置しており、人の往来やモノの集積が途絶えない要衝であり、そして他地域へ向かう玄関口の一つであったと想定されます。古代集落が展開する背景には、寺院の建立や官道の整備などさまざまな要因があったと考えられますが、各務郡においては須恵器生産も大きな力ギを握っていると推察します。今後も発掘調査の成果を紹介するとともに、古代各務郡の成り立ちを解明していきたいと思えます。(三浦薫平)

いわゆる「関ヶ原の戦い」は、慶長5年(一六〇〇)9月15日、美濃国関ヶ原において、徳川家康率いる東軍と、石田三成率いる西軍との合戦のことをいいます。しかし、同年8月にはすでに、美濃国各地で激しい合戦が繰り広げられていました。こうした美濃国における「関ヶ原の戦い」前哨戦について、多くの方に知っていただきたく、シンポジウムを開催しました。

地域に根差した議論

今回のシンポジウムでは、合戦が繰り広げられた地域を研究のフィールドとしている、山田昭彦氏(岐阜県博物館)、長谷健生(各務原市歴史民俗資料館)、奥村和磨氏(羽島市郷土史家)、内堀信雄氏(岐阜市文化財保護課)が講師として登壇しました。講演後の座談会では、文献史料だけでは分からない、現在は失われてしまった城跡や、変わってしまった地形について取り上げるなど、地域に根差した議論ができたのではないかと思います。

全国から集結した参加者

450人の来場者は、当館が開催したシンポジウムとしては過去最多でした。アンケート集計を見ると、実に約67%が市外からの来場者でした。岐阜市・関ヶ原町など市外で開

催された関ヶ原の戦い関連の講演会で、チラシを配布したことが大きかったと思われる。戦国時代の講演会はファンも多く、SNSで講演会の情報が拡散され、それを見て埼玉県や高知県など遠方からもご来場いただきました。また50歳代以下が約33%と、当館の企画としては若い方が多く参加されました。二〇二六年には、NHK大河ドラマ『豊臣兄弟!』が放送予定であり、戦国時代への注目が集まること予想されます。今後も戦乱の時代における各務原地域の戦略的重要性について、多くの方に知ってもらえるよう、イベントを企画していきたいと思えます。(長谷健生)

関ヶ原の戦い前哨戦シンポジウム

慶長五年八月の美濃

各務原に 全国から集結!

- ◇基調講演「慶長五年八月の美濃」岐阜県博物館 山田 昭彦
◇講演「米野・新加納の戦い」各務原市歴史民俗資料館 長谷 健生
「竹ヶ鼻城の戦い」羽島市郷土史家 奥村 和磨
「岐阜城の戦い」岐阜市文化財保護課 内堀 信雄
◇座談会 ～慶長五年八月の美濃を位置づける～



座談会では、関ヶ原前哨戦以前にも、織田信長の美濃攻略戦や、小牧・長久手の戦いなど、数々の合戦が濃尾平野で繰り広げられたこと、そうした合戦における美濃国の重要性などが議論されました。(写真左から内堀信雄氏、奥村和磨氏、山田昭彦氏)

かかみがはら百科プラス No.8 (A4・8ページ) 歴史民俗資料館で無料配布中

令和6年度各務原市所蔵作品企画展

「坪内節太郎展-芝居をみる-」

各務原市では、市ゆかりの画家・坪内節太郎の油彩画、墨彩画などを多数所蔵しています。

令和6年度は、「清流の国ぎふ文化祭2024の関連事業「坪内節太郎展-芝居をみる-」として「ARTX歴史」をテーマに、節太郎が歌舞伎の観劇中にスケッチした原画40点を、国指定重要有形民俗文化財である各務の舞台「村国座」で展示しました。

画家・坪内節太郎

坪内節太郎は（明治38年（一九〇五）岐阜県稲葉郡那加村桐野の現各務原市那加桐野町）に父・峯三郎と母・ていの長男として生まれました。節太郎が10歳の時に、一家は大阪に転居。幼い頃より曾祖父や父に芝居見物に連れられていたこともあり、節太郎は芝居を好み、20代の頃より歌舞伎や文楽などに取材した作品を制作し始めます。

節太郎は、多くの芝居絵を遺していますが、戦前は洋画家として春陽会や独立美術協会などに作品を発表していました。特に後年にかけては簡潔な形態と色彩の中に深い趣を湛

ARTX歴史

村国座では、毎年10月に村国神社で行われる秋の例大祭に合わせ、奉納余興として子供歌舞伎が行われます。今回の企画展では、各務中組区の協力のもと、奉納後に子供歌舞伎で使用した『新版歌祭文（野崎村）』の舞台セットを残し、芝居開催時しか見られない舞台の様子を、上演時の写真とともに公開しました。

また、過去に奉納された同じ演目の記録映像を流すことで、音声と映像の臨場感を活かし、芝居の余韻に浸れる、芝居小屋の「場」と融合した鑑賞の形を試みました。（廣江貴子）



村国座で奉納された子供歌舞伎（各務中組区）令和6年10月12・13日

えた作風を得意としました。

昭和20年（一九四五）、節太郎は岐阜県武儀郡美濃町（現岐阜県美濃市）に疎開し、その後、岐阜市に転居します。東京の行動美術協会に出品し、その地方展を岐阜で開催するために奔走するなど、岐阜の美術の発展に尽力し、昭和54年（一九七九）に74歳で亡くなるまで、岐阜と中央の文化をつなぎ、地域の文化芸術の振興に貢献しました。



かかみがはら百科プラス No.9 (A4・8ページ) 歴史民俗資料館で無料配布中

節太郎の芝居絵スケッチ



《舞台廻り 37-2》 昭和37年2月上演『新版歌祭文（野崎村）』より

「野崎村」終盤の、お光が舟で去るお染を見送る場面が描かれたスケッチです。節太郎の著書には、「和帳へ矢立の筆を走らせ」と記されており、場面や情報を素早く筆で記録していることがわかります。

村国座内で、視線を遮らない場を整え、かつ展示設備のない場所で小品の原画を展示するため、小さめの展示壁を製作し、細心の注意を払った装丁を行いました。結果、芝居小屋の中で「芝居絵をみる」環境が整い、節太郎の観ていた歌舞伎の世界により没入できる、「ARTX歴史」それぞれの価値を活かした空間構成を作ることができました。



アートクロストーク「歌舞伎絵をみる」 令和6年11月9日

会期中に、「節太郎の作品からみた歌舞伎の世界」を、より身近に感じる機会として、歌舞伎ソムリエのおくだ健太郎氏を招き、担当学芸員とクロストーク「歌舞伎絵をみる」を開催しました。

節太郎は昭和51年（一九七六）に村国座を訪れています。地方で発展・継承した歌舞伎と節太郎が描いた歌舞伎のスケッチとは、場面の表現に違いが見られます。

クロストークでは、おくだ氏が、描かれた歌舞伎場面の解釈を始め、

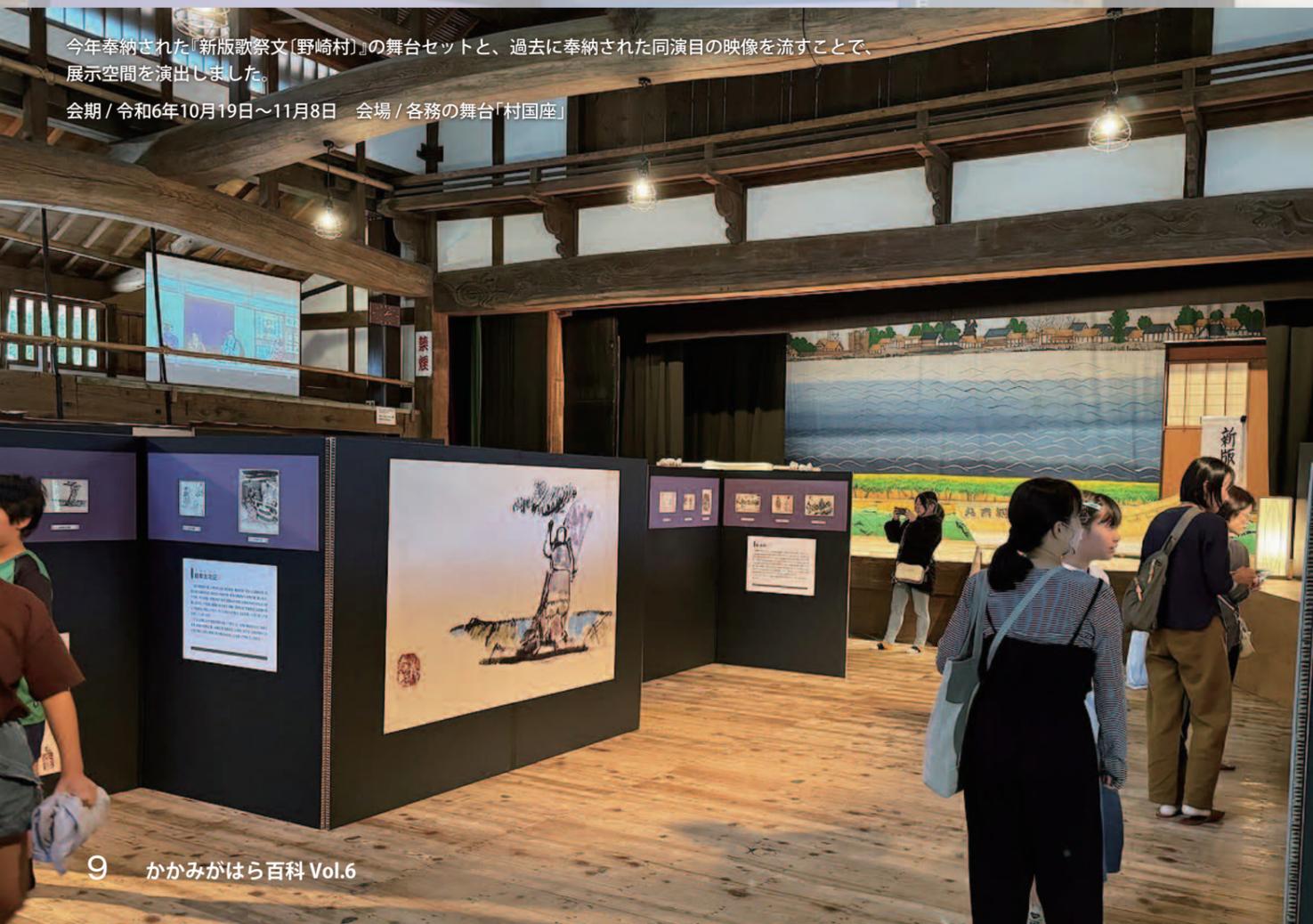


《三番叟》

地方ごとの違いから個々のキャラクターまでを、身振り手振りを交えて詳細に解説され、スケッチに動きのあるイメージが重なりました。また、作品から節太郎の着眼点や演目の好みなどに言及し、多岐にわたる内容で盛り上がりました。

今年奉納された『新版歌祭文（野崎村）』の舞台セットと、過去に奉納された同演目の映像を流すことで、展示空間を演出しました。

会期 / 令和6年10月19日～11月8日 会場 / 各務の舞台「村国座」





ワークショップ みんなでつなぐ物語

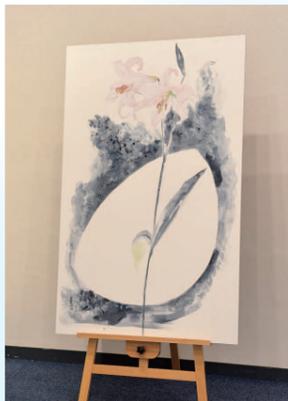


展示室Bでは、あらかじめ金の雲を描いた全長7mの絵絹の巻物に、来場者が絵を描くワークショップ「みんなでつなぐ物語」を開催しました。最初に描かれた絵から連想される絵を描き連ねていくことで、最終日には長い絵絹の絵巻物の作品が完成しました。会期中にイベントを企画したことは、展示会の周知とリピーターの増加につながりました。



第48回全国高等学校総合文化祭「清流の国ぎふ総文2024」では、高校生による「絵絹を使用したワークショップ」が開催されました。本企画展では、他校生とともにワークショップを担当した各務原西高等学校美術部有志の皆さんが制作した、絵絹に描いた絵巻物の作品を展示しました。

公開制作



11月16日(土)10:00~14:30
林真氏が絵絹に作品を描く様子を公開しました。



会場では、掛け軸や屏風などの様々な絵絹作品を紹介しました。絵絹という「素材」に着目した企画展は、他にあまり類をみないものであり、生産地である各務原市で「@えぎぬ展」が開催できたことに大きな意義があります。今後、文化資源としての「絵絹」を活用していくことで、地域の魅力向上につなげていきたいと考えています。(廣江貴子)



令和6年度 各務原市歴史民俗資料館 企画展

@えぎぬ展

市内で生産される絵絹の可能性を拡げ、未来に継承していく「文化資源」として、新しい価値の創出を目的とする「@えぎぬ展」を開催しました。

会期 / 令和6年11月2日~11月24日 会場 / 中央図書館3階 展示室A・B



令和5年より市庁舎アートウィンドウで、企画展「かかみがはら@えぎぬ展」を定期的に開催しています。「@えぎぬ」の「@」に日本画の基底材である絵絹の「文化的な素地」場」という意味を込めており、絵絹を紹介して多くの人と地域がつながることを目的としています。今年、「清流の国ぎふ」文化祭2024の応援事業として「@えぎぬ展」を開催しました。展示室Aでは、アートウィンドウで紹介した作家を含めた、県内外で現在活躍中の作家14名の作品を展示しました。



アーティストトーク

会期中には、出展作家によるアーティストトークを3回開催しました。作家が絵絹に描く技法や、自身の表現について語りました。

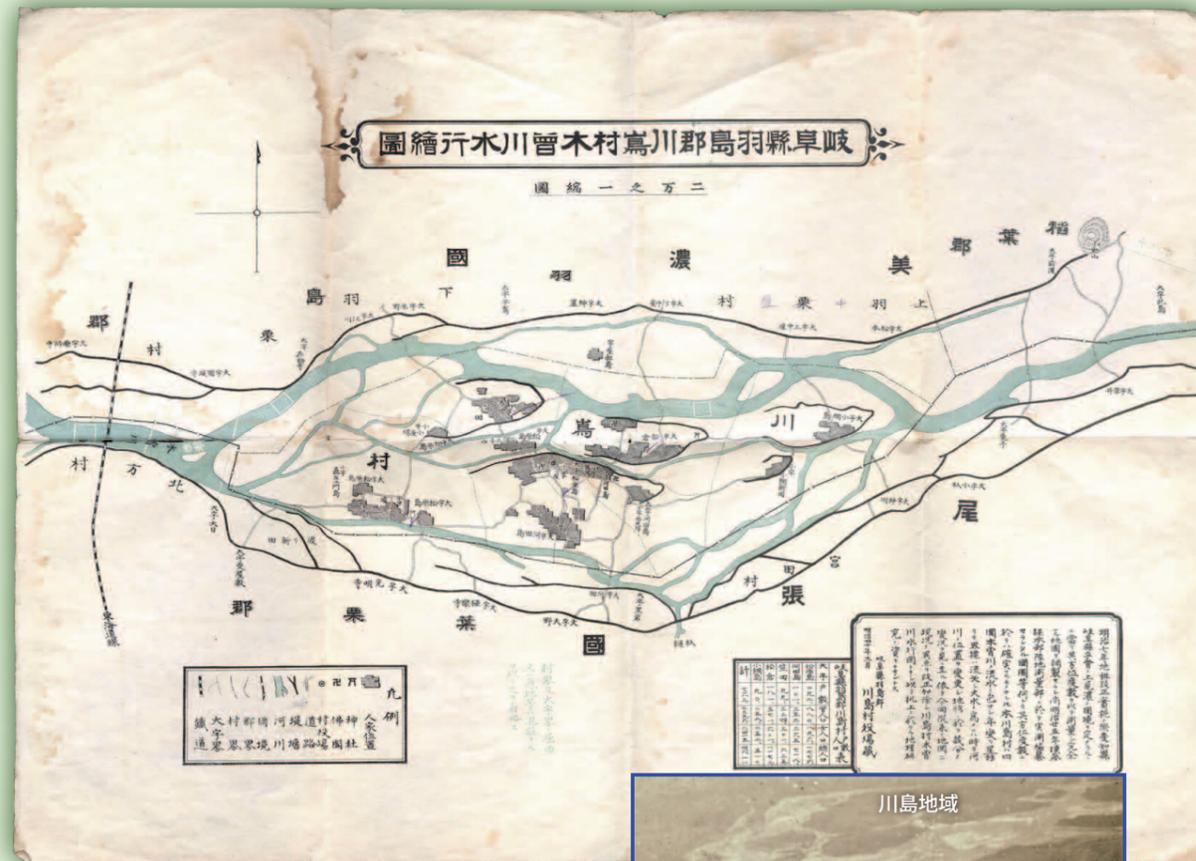
- ①11月10日(日) 10:00~
上村俊明、河村尚江、蔵田美和
- ②11月10日(日) 14:00~
宇城翔子、向井大祐、山田隆量
- ③11月16日(土) 15:00~
林真、福本百恵

出展作家(五十首順)

磯部 絢子・宇城 翔子・大嶋 直哉
 上村 俊明・河村 尚江・蔵田 美和
 武田 裕子・長谷川 喜久・林 真
 福本 百恵・京都 絵美・向井 大祐
 山田 隆量・山本 真一

川島合併20周年 川島の昔と今

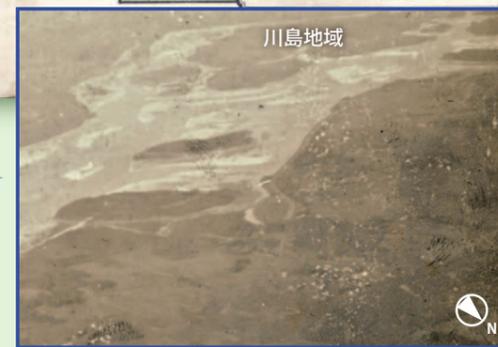
令和6年度、各務原市と羽島郡川島町の合併から20年を迎えました。また、川島町の前身、川島村が成立してから135年となる節目の年でした。今に残る資料から、川島の昔を振り返ってみたいと思います。



資料1 木曾川水行図 (明治40年)



写真1 川島地域を北東上空から望む(大正9年)



川島村の地図と写真

川島町の前身である川島村が成立した明治22年(一八八九)当時は、木曾川の流れが幾筋にも分かれ、ひとたび洪水が起ると、川筋や島の地形が変わりました。明治40年の「木曾川水行図」(資料1)や、大正9年(一九二〇)に撮影された航空写真(写真1)を見ると、当時の木曾川本流は笠田の北側を流れていたことが分かります。また、絵図中の太い黒線は堤防を表しており、それぞれの集落を守る堤防が築かれていました。

川島周辺の木曾川がいわゆる「三派川」にまとめられたのは、大正から昭和にかけて行われた河川改修工事によります。この時、本流を笠田の南側に通すこととなりました。流路となる場所があり、当時30戸・約180人が暮らしていた三斗山島では、大正14年、全住民が島外に転居し、島は除去されました。その後も断続的に改修工事や堤防の補強工事は進められ、現在では堤防が決壊するような水害はなくなりました。

生業・教育・祭り・交通

「川島」はその名の通り、川の中の島で構成された町です。稲作が困難な砂地の土壌であり、農業生産よりも、川漁や建材となる川石採集、養蚕・燃糸・繊維り業などの産業が盛んでした。木曾川文化史料館には、それら生業の道具が多く展示されています。

川島町は、学校教育・社会教育に力を入れていた町でした。平成8年(一九九六)には町制40周年を記念し、CD-R版の町勢要覧(写真2)が作られました。これは小中学校の情報教育の教材としての活用も企図したものであり、全国でも先進的な事例でした。

川島の夏の風物詩、川まつりは、昭和38年以降中断していましたが、



写真2 CD-R版 町勢要覧



写真3 川まつりテレホンカード

羽島郡川島町が、各務原市と合併してから20年が経ちました。しかし現在でも、川島町時代の名残を見ることが出来ます。敷設されたマンホールや側溝の蓋には、川島町章や、町時代のデザインが多く残されています(写真4)。

川島町の名残

平成7年に復活しました。川まつりは、元々は南派川で行われていたが、現在では河川環境楽園の池で開催されています(写真3)。

昭和31年(一九五六)に「川島村」は「川島町」になりましたが、その頃はまだ川を渡るのに渡船や木橋を使っていました。町の発展のために川の水量に左右されない頑丈な橋が求められ、昭和30年代に相次いで河田橋・渡橋・川島大橋などが建造されました。島外との往来が容易になり、エーザイ川島工場の開業などもあって、町は大きく発展していきま

島村が成立して115年の節目の年であったことを記念したものです。近年、川島地域には転入者が多く、「川島町」だったことを知らない人も増えています。しかし、木曾川と共に歩んできた川島地域は、家の建て方や堤防の築き方、祭りや食文化に至るまで、合併前の各務原市域とはさまざま違いがあります。各務原市の歴史を考える上で、川島町の地域性を考慮することは大切です。今後木曾川文化史料館を拠点に、地域の人々に各務原市の中の川島地域を知ってもらえるよう、発信していきたいと思っています。(引地歩)



写真4 町章が入ったマンホール(右) 町時代にデザインされた側溝の蓋(左)



写真5 川島115年碑



市役所本庁舎1階の歴史ウィンドウでは、合併20周年を記念して、旧役場の屋根瓦や合併協定書などを展示しました。

「川島の135年」 会期/9月30日～12月20日

新指定！ 聖観音菩薩立像

令和6年8月20日、市教育委員会は、川崎山薬師寺(那加雄飛ヶ丘町)が所有する「聖観音菩薩立像」(写真1)を、市の新たな重要文化財として指定しました。この像にはどういったところに価値があり、55件目の市指定文化財となったのか、像の伝来や特徴とともにご紹介します。



像の伝来

像は、もとは静岡県内の寺院に祀られていました。この寺院が廃寺となったため、像は一時、法相宗大本山薬師寺(奈良県)に移り、保管され、昭和50年代に川崎山薬師寺にやって来ました。

その後、像は、時間の経過とともに自立できないほど傷みが激しくなりました。そこで、川崎山薬師寺は、令和3年末に茨城県の仏像修復師に修復を依頼します。依頼を受けた仏像修復師がこの像を調査したところ、興味深い事実が判明しました。

初めは平安後期の像だった！

修復前の像は、長らく「十一面観音像」の姿で親しまれてきました(写真2)。しかし、その外観をよく見ると、頭部の十面が大雑把なつくりであるなど、不自然な部分がいくつかりありました。



写真2 十一面観音像(修復前)

写真1 聖観音菩薩立像(修復後)

像の特徴

制作時期を平安時代後期まで遡る特徴を持つ像は、市内でも最古級であり、貴重です。そのため、市教育委員会はこの像を「聖観音菩薩立像」として、市の重要文化財に指定しました。

像はカヤの一木造り(※1)で、寄木造り(※2)よりも古い技法で作られています。この像に見られるふっくらとした丸顔でやさしい表情、なで肩で厚みのない側面(写真6)、動きの少ない直立の体勢などは平安時代後期の仏像の特徴を示しています。もとは静岡県に伝わった像であるため、全体的な彫りや造形そのものに当時の政治・文化の中心であった近畿地方の像とは異なる素朴さがあることも、この像の特徴です。

と併せて、多くの方が来場されました。来場者には、ガラスケースに入る、指定されたばかりの像を全方向から細部までご覧いただきました(写真7)。(福井隆士)

像の表面に重ねられた塗膜を丁寧に剥がして観察すると、口元の木材の色が他の部分と比べて明るく、後の時代に手を加えられたことが分かります(写真3・4)。この「十一面観音像」、どうやらいろいろな後補(改変)がなされているようです(写真5)。



写真5 修復中の頭頂部
頭頂部の穴は、十面(後補)を差し込むためのもの

「聖観音菩薩立像」は、通常は非公開ですが、川崎山薬師寺の協力のもと、市重要文化財の指定を記念して、中央図書館3階の歴史ギャラリーで特別公開を行いました。関連講演会



写真7 特別公開の様子
会期 / 8月31日～9月16日



写真3 塗膜はがしの様子



写真4 塗膜はがし後の口元

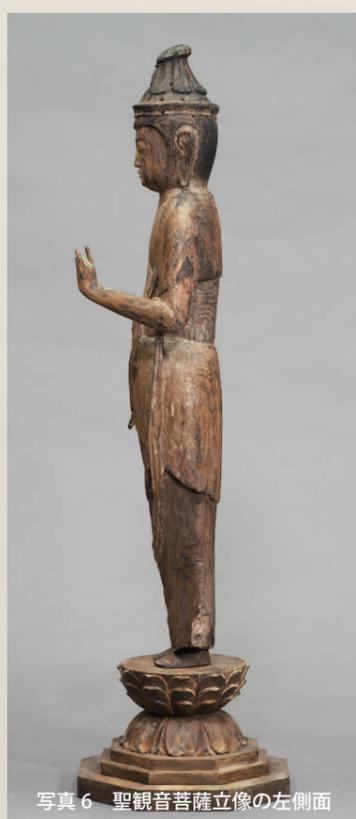


写真6 聖観音菩薩立像の左側面

【指定概要】

- ・名称 聖観音菩薩立像
- ・所在地 各務原市那加雄飛ヶ丘町129 川崎山薬師寺(非公開)
- ・構造等 カヤ材一木造り、漆箔、白毫水晶嵌入
- ・像高 80.5 cm
- ・作者 不明
- ・年代 12世紀頃(平安時代後期)

※1 一木造り…頭や胴体などの主要な部分を一本の木から像を彫り出す技法
※2 寄木造り…頭や胴体などを複数の部分に分け、組み合わせて作る技法

県史跡から国史跡へ 坊の塚古墳の真価

■坊の塚古墳の被葬者は？

坊の塚古墳は、いつの頃からか「ポー塚」と呼ばれ、お坊さんの塚と考えられていたようです。また、北東390mに位置する衣裳塚古墳は、お坊さんの衣裳を埋めたといわれますが、いずれも根拠のない想像です。なぜなら、坊の塚古墳が築造された4世紀後葉、日本にはまだ仏教が伝わっていなかったからです。

では、一体どんな人物が葬られたのでしょうか。そのような記憶は千数百年も経てば途切れてしまい、坊の塚に限らず国内の古墳のほとんどは、誰の墓なのか分からなくなつて

います。しかし、どのような身分の人物が葬られたのかについては、考古学的に推定することができます。

■古墳が造られた地形に注目

坊の塚古墳が造られた土地は、河岸段丘の直上です(図1)。高低差が13mもある崖縁の地形を選んで造られました。河岸段丘とは、土砂が厚く堆積した土地(各務原台地)を、木曾川の流れが削り取ったことによつて出来た崖地形のことです。

古墳は有力者の墓であると同時に、権力を誇示するという政治的意味合いの強い土木構造物でした。そのため、古墳の形、規模のほか、立

地環境も重要な選択肢になります。

■特別な古墳が分布

同じ河岸段丘上には、4世紀から7世紀の間に築造された複数の古墳が分布します。坊の塚古墳は墳長120mという県下第2位の規模を有する前方後円墳、衣裳塚古墳は県下最大級の円墳、一輪山古墳(滅失)は三角縁神獸鏡を副葬、鵜沼西町古墳は一辺15m(基壇20m)の方墳、二ノ宮神社古墳の横穴式石室は最大級(現況は短く改変)、桑原野山1号古墳(滅失)は推定墳長22mの前方後円墳、金縄塚古墳は江戸時代に金の鎖が出土したと伝わります。

各務原市域には600〜700基の古墳が分布したといわれますが、大半は直径12m前後の円墳です。それに対し鵜沼の河岸段丘上に造られた古墳は、諸属性が際立っていることから地域集団のリーダーを担った人物の墓、すなわち「特別な古墳」と考えられます。

また、今年度の試掘調査によつて、一輪山古墳の近くから古墳時代の直前、邪馬台国時代の墳墓の存在を示す土器が出土し注目されます。

■眺望という重要性

今ではビルや住宅が建ち、視界は遮られますが、段丘から南を見ると眼下に低位段丘、木曾川を越えた先に濃尾平野を眺望することができます。木曾川は、古代も美濃と尾張の国境であり、地域有数の水上交通路だったと考えられます。そして古墳時代後期になると低位段丘を斜走する東山道の建設が始まったと推定されています。

国境に臨み、水路と陸路の要衝地を見下ろすことのできる土地、また、これらの場所から見上げた位置に特別な古墳を築いてアピールすること

が、重要な政治的意味を持っていたと考えられます。

■日本史上の坊の塚古墳

坊の塚古墳は、三段築成の前方後円墳で円筒埴輪を備えるなど、4世紀後葉にヤマト王権の力が強く関与したことを示します。

この頃、大和地方では古墳群を河川の近くへ移動していたことが分かっています。そこには、水上交通路の掌握という政策があったと考えられており、地方においても古墳の築造位置に同様な政策を反映させていた可能性があります。(西村勝広)

令和6年10月11日、文部科学省は坊の塚古墳の国史跡指定を官報に告示しました。

私たちは、この古墳の持つ高い歴史的ポテンシャルを感じつつも、価値づけに必要な情報を得るため、発掘調査に6年の歳月を要しました。毎年の発掘調査は期待以上の成果を上げ、国史跡の指定に弾みをつけました。

国史跡指定後、文化庁の補助のもとで坊の塚古墳保存活用計画策定に着手し、将来的な古墳整備に向けて新たなスタートを切ります。

坊の塚古墳の国史跡範囲(緑色)

今回、指定となった範囲は、墳丘と周壕の一部、および間に挟まれた市道です。

第4次発掘調査現地説明会の様子

発掘調査には、毎回多くの市民のみなさまに関心を持っていただきました。今後は、保存と活用について、ご期待に応えられるよう計画を進めていきます。



図1 低位段丘を臨む「特別な古墳」
赤色立体地図 ぎふ森林情報 WebMAP より引用

学校関連事業

Table with 5 columns: No., 日, 学校名, 内容, 人数. Lists school activities from June to February.

出前講座・職員講師派遣

Table with 5 columns: No., 日, 団体等, 内容, 人数. Lists external lectures and staff assignments from April to March.



- ① 鶴沼第三小学校「鶴三小校区の昔」
② 特別公開「修復で目覚めた平安後期の仏像 聖観音菩薩」
③ 夏休み子ども講座「作ってみよう！古代の工芸品勾玉」
④ ヒストリービューイング「目でふれる各務原の歴史」
⑤ アートウィンドウ「武田裕子展 続編に描く」

企画展
中世鶴沼の栄枯盛衰と鶴沼古市場遺跡の発掘調査から
市所蔵作品企画展「坪内節太郎展 芝居をみる」
特別公開
「修復で目覚めた平安後期の仏像 聖観音菩薩」
「関ヶ原の戦い前哨戦シンポジウム」
「夏休み子ども講座」
「各務原市の史書を学ぼう」
「作ってみよう！古代の工芸品勾玉」
「かかみがはら歴史の時間」
「新発見！各務原市の歴史」ハナレ展
「文化財一斉公開」
「オオンモール各務原インター共催イベント」
「文化財防犯」防災訓練
「各務原野外セミナー」
「各務原野史」
「かかみがはら寺子屋事業」
「寄贈書誌」
「来館者数」

もっと知りたい! いま、むかし

Q これは、何に使うモノだろう。
みんな、わかるかな?



じ せん 耳 栓

はくつちようさ つち つく ふ し ぎ かたち み
発掘調査で、土で作られた不思議な形のモノが見つかりました。
これは、古くから「耳栓」と呼ばれているものです。字は「耳」に「栓」と書きますが、耳に入れるには大きすぎるので、**耳飾り**として使われたのではないかと考えられています。
これらは、縄文時代の「炉畑遺跡」から出土したもので、長さは3cmくらいです。
とお むかし も じょうもんじん かっこう
遠い昔のイメージしか持てなかった縄文人がどのような格好をしていたのか、少しだけ現実に近づいたのではないのでしょうか。



ほか ち い き あたま りょうがわ
他の地域で、耳栓が頭の両側から出土した例があります。



あな あ とお
耳たぶに大きな穴を開けて、そこに通して使っていたのかもしれない。

ちゅうおうとしょかん かい れきし じ せん どくう
中央図書館3階の「歴史ギャラリー」には、「耳栓」のほか、土偶や
つりてがたとき てんじ
吊手形土器などを展示しています。ぜひ見に来てください。
かかみがはら し な かもんぜんちよう
各務原市那加門前町 3-1-3 各務原市立中央図書館 3階

